

亀井昭陽『楚辭訣』解題および「離騷」篇定本（附校勘）

Annotation of Kamei Shoyo's *Soji-Ketsu* (楚辭訣)

And

Revision of Chapter *Lisao* (離騷) 's Manuscripts

田宮昌子

小稿では、亀井昭陽『楚辭訣』（以下『訣』）を読み解くために、まず当該書についてその概容を明らかにし、主な読解対象とする「離騷」篇の本文を定める。

キーワード

亀井昭陽、亀井南冥、楚辭訣、離騷

目次

I 亀井昭陽『楚辭訣』解題

- 一、亀井家学―昭陽の学問の背景
- 二、『楚辭訣』に関する先行研究
- 三、『楚辭訣』の成書過程
- 四、『楚辭訣』の概容

II 『楚辭訣』『離騷』篇定本（附校勘）

I 亀井昭陽『楚辭訣』解題

一、亀井家学―昭陽の学問の背景

亀井昭陽の学問は父の南冥を受けたものであり、南冥・昭陽父子二人とその一門の学は亀井家学^①と称されるが、亀井三代とも称されるように、その発端は南冥の父聴因にある。

1、聴因（一七〇三^②―一七八〇年、享年七七歳）

聴因は、諱は鑒、字は処静、号は千秋翁。筑前怡土郡の人。「性磊落にして大志あり、膂力人に過ぎ、少時遊俠を好んで無頼の徒と交った^③」というが、後に学問を志して医学を修め、まず姪浜、のち福岡に移って医業を開き、その傍ら家塾・蜚英館^④を設けた。当時、徂徠学派が全国を風靡した影響を受け、護園^{けんえん}の学^⑤に親しみ、長男南冥、次男曇采を徂徠学派に連なる肥前蓮池の学僧・釈大潮に弟子入りさせた。

2、南冥（一七四三―一八一四年、享年七十二歳）

諱は魯、字は道載（道哉とも書す）、通称は主水、晩年に信天

翁、狂念居士、苞樓などの号を用いる。或は「東西南北人」の雅印を用いる。一七四三（寛保三）年、父聰因が開業していた姪浜に生まれる。十四歳の時、父の命により釈大潮に師事、二十歳で上京、古医方・吉益東洞に謁したが意に充たず、大阪に去って、永富独嘯菴に師事し、永富門の三傑と称される。これらの師はみな徂徠学の系譜に連なる。一七六四（明和元）年、二十一歳の時、朝鮮通信使接待の藩士に加わり、通信使随員と詩文唱和し、一躍文名を挙げる。二二歳の時、父に従って福岡唐人町に移り、家塾・蜚英館において儒と医を講じた。

一七七八（安永七）年、三六歳の時、平民の医師の身から、福岡藩（黒田藩）儒医に拔擢され、十五人扶持を給せられる。一七八四（天明四）年、藩では全国でも珍しく、東西二箇所の藩校を開いた。代々朱子学を奉じる竹田家が主宰する東学問所・修猷館と、徂徠学の学統を引く南冥を祭酒とした西学問所・甘棠館である。時に南冥四二歳であった。南冥はその教育実践が咸宜園を興した広瀬淡窓に影響を与えたことで知られるように、人材育成に優れる一方で、「狂狷」を以て自任し、「豪放にして大行を重んじて細瑾を顧みず、尊貴に屈せず、直言して他を憚らない風があつて、人の怨みをかかった」。

一七九〇（寛政二）年には寛政異学の禁が発せられ、朱子学が唯一の官学となった。幕政の動向と藩内の主導権争いとが絡み、一七九二（寛政四）年、南冥五十歳の時、藩命により廢黜される。その後、終身禁足の中でも著述を続け、代表的著述となる『論語語由』も脱稿後十三年の歳月を要したといえ刊行を見る。しか

し、一七九八（寛政十）年、藩学としての甘棠館は唐人町の火災に類焼して消失したのを機に廢止となり、再建した家塾や自宅も二年後に再度類焼する。南冥はこの頃から心疾を生じるようになり、一八一四（文化十一）年、唐人町から移った百道松原の自宅で、自室より出火して死亡する。当時から自焚説が囁かれたという。淡窓は「ソモソモ先生ノ人トナリ、伸ブルコトヲ能クスレドモ、屈スルコトヲ能クセズ。物ニ克ツニ勇ニシテ己ニ克ツニ怯シ。遂ニ千尺ノ鯨鯢ヲ以テ、螻蟻ニ困メラレタリ。豈惜マザルベケンヤ」と歎じた。

3、昭陽（一七七三～一八三六年、享年六四歳）

昭陽は、諱は昱、通称は昱太郎、字は元鳳、号には月窟、空石、槃谷、匏居、天山遯者、下知老居などがある。一七七三（安永二）年八月十一日、祖父と父が家業を築いた福岡唐人町に南冥の長子として生まれた。十代から経・子の注を抄して著述をなし、「麒麟児」と称された。

一七九〇（寛政二）年（昭陽十八歳）五月、寛政異学の禁が発せられる。一七九二年、西学祭酒であった南冥が廢黜されると、二十歳にして、父の後を受けて家督を相続し、西学訓導として、十五人扶持を給せられる。二六歳の一七九八（寛政十）年、唐人町で出火、甘棠館が類焼により消失すると、藩議は西学再建を許さず、少数の例外を除いて甘棠館教員の儒業職を停止し、これらを平士とした。昭陽も十五人扶持の城代組平士に編入される。昭陽は、平時は城下での隊伍会勤務、時には異国船来航に備えた烽火台勤務など、下級藩士としての勤めを果たしながら、家塾を再

興して教学と著述を続ける。一八〇六（文化三）年、三四歳の時、福岡藩の支藩である秋月藩主の参勤に随行して江戸に赴き、この間、藩主黒田長舒の好意によって出版が実現することとなった父の『論語語由』の校正を行った。長舒はかつて南冥を毎月秋月に招いて講義を受けており、南冥廃黜の後には昭陽が代講していた。昭陽は翌年四月に江戸から戻って後は生涯福岡に留まって学究生活を送った。一八三六（天保七）年五月一七日没す。

昭陽の代表作については、『毛詩考』あるいは『左伝續考』と論が一致しないが、その著述は四書五経全てに及び、賦集『東遊賦』、漢文体日記『烽山日記』など文学創作も少なくない⁽¹⁵⁾。

亀井父子の著作書誌を編んだ阿部隆一は昭陽をこう評している。その気象は豪爽にして慷慨、情に厚くして頗る父の風があつて、冷静緻密な考証論考の間に経世の志気を発せしめている。しかし父に鑑みて克己謹肅、身を持することを極めて端正：

（中略）：その学識は経史百家に通じて博洽、その学風は周綜精究、特に古文辞を善くした。徂徠の古文辞学は詩文の上ではその力を發揮したが、学術上では、研究方法は明かにされたが、実質はいさゝか看板倒れの感がある。それを大成して成果を上げたのは実に昭陽である。昭陽は徂徠学派が示した研究方法を文献学上に実際に応用して、古言・古文法・古字に関する深き蘊蓄、その比類稀れな鋭敏深博なる読書力と相まつて先秦古書を縦横に融貫参校対比して古義を明にし、古典解釈法に一新機軸を開き、考証注釈には先人未言の創見に富んだ業績を多く遺した⁽¹⁶⁾。

しかしながら、昭陽の学は、一つには昭陽が生涯地方に留まり、中央の学界に出なかったため、更には、その著述の多くが未刊のまま、写本の形態で弟子および少数の学者の間に伝わるのみであったため、一般に広く知られていない。

以上、南冥・昭陽の学問は経学と文学を両輪としていて、徂徠学派の特徴を顕著に示している。亀井家学および昭陽の学問と人生の困難の背景には、当時支配的であった朱子学に反発して興った徂徠学の一時の隆盛と、ついに唯一の官学となった朱子学との対立：といった幕末日本の学問・思想の動向があることが分かる。なお、亀井三代には、当時の社会においては相対的に富裕で自由な「浦」出身の気風を反映するとされる俠気が共通して見られ、南冥は「儒侠」を自称してもいる。平民出自に由来することのような氣質と上昇志向が世襲の士族や儒者の反感を招き易かったことも亀井家の悲運の要因として指摘されている⁽¹⁷⁾。

『亀井南冥・昭陽全集』全八巻九冊のうち七冊を昭陽の著作が占めるが、亀井家学に関する著述や研究は南冥に関するものが昭陽を遥かに凌ぐ⁽¹⁸⁾。亀井家学は、南冥の強烈な個性と起伏に富んだ悲劇的な生涯によって耳目を集め、昭陽が営々と積み上げた学術成果によってその実を満たしていると言える。

二、『楚辭訣』に関する先行研究

竹治貞夫は「邦儒の楚辭研究」において、江戸から明治・大正までの楚辭研究を概説する中で、江戸期では、秦鼎の『楚辭燈』校読の他には、昭陽『訣』のみを採り上げ、岡松壘谷『楚辭考』

の前に置く。管見の限り、日本で『訣』を日本の楚辞学史上に位置づけた最初である。その注解の特色として、透徹した合理性と古代文献による適切な徴証を挙げ、更に修辭に着目した鋭利な指摘が少なくないとして、「片々たる小冊子」で研究を全面的に展開するに至っていないが、「数少ない邦儒の楚辞注解として不滅の価値を有する」と評する。⁽²⁰⁾

稲畑耕一郎「日本楚辞研究前史述評」⁽²¹⁾は、楚辞関連文献の伝来、楚辞の普及など、七世紀以降の日本古代の楚辞受容から説き起し、江戸期に隆盛した漢学における楚辞研究著述を中心に紹介する。朱新林（後述）が指摘するように、江戸期の楚辞学については多くを竹治前掲書に拠っているが、この時期の楚辞学についてより明確に自身の評価を示している。稲畑は、浅見綱斎（一六五二～一七二一年）『楚辭師説』、蘆東山（一六九六～一七七六年）『楚辭評園』、亀井昭陽『楚辭訣』と、時系列的に採り上げた上で、綱斎の『師説』は朱注を踏襲したもので独自見解は少ないとして、「江戸期の楚辞研究成果として挙げられるのは上述の二例のみ」⁽²²⁾（つまり、東山『評園』と昭陽『訣』）としている。

しかし、『訣』について、日本では管見の限り専論を見ない。一方、中国では近年『訣』に関する専論が続いている。その中で、上記の稲畑論文は中国の学術誌に中国語で発表されているため、中国での影響力が大きいようである。また、稲畑論文中で重視されている竹治の『楚辞研究』も同様に注目され、『訣』を含め、中国における日本楚辞学の成果の認知および評価に大きく影響している。以下、中国で発表された『訣』に関する主な論考を見てみる。

朱新林「日本庆应义塾大学藏亀井昭陽《楚辭訣》写本考」⁽²³⁾は、稲畑論文を受け、それを更に一歩進める形で、江戸期日本楚辞研究の代表的な成果として、綱斎『師説』、東山『評園』、昭陽『訣』を挙げ、三者の中で特に昭陽『訣』について、

日本学者第一部独立注解《楚辭》的研究著作、突破了以朱子学阐发大义，鲜关考证的《楚辭》研究方法，开始以汉学考据的方式解读《楚辭》……一举扭转了此前以朱子学治《楚辭》的流弊，奠定了以考据学方法为研究《楚辭》的基础手段，开启了日本楚辞学研究的新方向，启示了日本学者研究《楚辭》的后来人（日本の研究者が独自に楚辭を注解した初の学術著述であり、朱子学で大義を闡明し、考証を軽んじるという楚辞研究の手法を突破し、漢学考証の手法で楚辭を解説することを始め：朱子学で楚辭を治めるという従来の悪習を一挙に転換し、考証学の手法を楚辞研究の基本的手法として位置付け、日本楚辞学の新方向を開き、後世の日本人楚辞研究者に範を示した）⁽²⁴⁾。

と高く評価する。

他に、周涌「日本鈔本《楚辭訣》整理與研究」⁽²⁵⁾、黄靈庚・石川三佐男「龙井昭陽与《楚辭訣》」⁽²⁶⁾、孫金鳳「林云铭《楚辭灯》在日本的传播与影响」などがある。これらの論考については、以下において適宜論及する。

三、『楚辭訣』の成書過程

『訣』の成書過程については、昭陽の日記中に具体的な記述を見つけることが出来る。日記の記述については先行研究にも言及があるが、原文に拠っておらず、単純な誤りや重要な点の見落としも見られる。以下に、日記原文に基づいて具体的に検証する。²⁸⁾

この日記は『空石日記』（以下、『日記』）。空石は昭陽の号である。壮年の四六歳から晩年の六三歳まで、著述・講義に最も充実していた時期の日記で、文体も記述内容もごく簡潔であるが、不思議な味わいがある。外出もせず淡々と続く学究生活に、妻の外出や子供たちの訪問が賑わいを添え、殆ど連日の飲酒と夜更しの記録にごく稀に混じる「終日不飲」に諧謔が滲む。更に、亀井家を訪れる人々からの揮毫などの所望と謝礼（酒と肴が主）の品名と量が出納帳のように記録され、不遇の学者に寄せられる地域の人々の敬意と支援が感じられもする。散文・辞賦など文学作品での評価も高かった昭陽らしい。²⁹⁾

以下に引く日記本文は、基本的に原文のままであるが、読みやすさを考慮して、筆者が句読点を挿入し、括弧内に若干の注記を加えた。「…」は省略、□は判読不能文字を示す。

1、家塾での楚辭講義『空石日記』卷十一、文政四（一八二一

）（二二）年（昭陽四九歳）

三月十八日 ……書生乞夜講楚辭、欣然校之、借道革楚辭燈、徹

夜鶏鳴。…。

十九日 ……夜始講離騷。…。

二〇日 以病辭隊伍會。夜講屈子。

二一日 ……物子會。

二二日 ……夜講離騷及九歌之三、頗有發明云。…。

二三日 校九歌。…。

二四日 ……夜講後…。

二五日 ……終日不飲、校河伯、山鬼。…夜校□□…。

二六日 ……校天問。…徂徠集會。夜講河伯至天問。…。

二七日 ……夜校天問徹曉。

二八日 ……校天問徹夜。講天問。

二九日 ……天問校了。…。

四月 朔日 ……夜校楚辭、迫鶏鳴臥。³⁰⁾

二日 ……徂徠集會。…夜講。

三日 ……乞聽講贈酒一升。…。

四日 ……夜講天問了。

五日 （関連記述なし）

六日 ……夜講。

七日 （関連記述なし）

八日 ……夜講。

九日、十日、十一日 （関連記述なし）

十二日 ……関蒙問添刪注之。飲初夜起徹曉。

十三日 （関連記述なし）

十四日 夜講九章、招魂。³¹⁾徹夜。

十五日 （関連記述なし）

十六日 ……物子會。…招魂講了。徹夜。

十七日 ……徹夜。

十八日 …… 徹夜。

十九日 …… 夜講大招了、楚辭止于是。徹夜。

昭陽が『訣』を家塾で初めて講じる発端から講義終了までの経緯が見える。昭陽は、塾生に楚辭講義を乞われて即座に快諾、その日のうちに藩医を務める弟子の道革³³から『燈』を借りて徹夜で読み、翌日から「離騷」の夜講を始める。その翌日には病を理由に欠勤するも夜講は休まず、発端から数えて三十一日目に『訣』に収める諸篇の講義を終了している。講義で採り上げる篇とそれらの順次は『楚辭訣』収録作およびそれらの篇次と基本的に一致する。

『日記』の記載からは、収録篇に対する昭陽の姿勢の違いを見ることが出来る。「離騷」については、塾生に講義を乞われた当日に校点を打ち始め、徹夜で『燈』を読み、翌日から夜講を始めている。一方、「天問」については校点に少なくとも四日を費やした上で夜講を始めており、「離騷」篇の準備期間はその長さで難度から見て相対的に短い。昭陽が従来から「離騷」を読み込んでいたことが窺われる³⁴。

「九章」「招魂」「大招」の三篇については、「校」の記録が無く、夜講の記録のみが有る。四月四日の「天問」講義終了から「九章」講義開始の十四日まで十日間あるため、単に記録が落ちているだけかもしれないが、二招での注で引用言及される文献は、『章句』『集注』『燈』が殆どで、バリエーションに乏しい。あまり精力を割いていない、重視していないことが窺われる。

更に、「遠遊」「卜居」「漁父」の三篇については、「校」のみな

らず講義の記録も無い。四月十四日に「夜講九章招魂」と「九章」に続けて「招魂」を講義していることから、これら三篇は講義していないようである。これら三篇は前三篇より更に重視していないと思われる（これらの問題については後に詳述）。

なお、楚辭講義を行っているこのひと月の間に、荻生徂徠の著述に関する研究会と思われる「物子會」³⁵「徂徠集會」を二回ずつ、計四回行っている。亀井家塾における教育と学問の傾向を反映すると言える。

2、「楚辭訣」の執筆 『空石日記』卷三八、天保五（一八三四）年（昭陽六二歳）

八月十九日 …… 尚書卒講、乞講楚辭。

二十日 …… 始就楚辭訣緒。

二一日～二三日（関連記述なし）

二四日 …… 離騷注了。夜會。

二五日～二九日（関連記述なし）

晦日（三十日）³⁶ 九歌畢、及天問。…。

九月朔日～六日（関連記述なし）

九月七日 …… 天問訣了。

八日、九日（関連記述なし）

十日 …… 注惜誦至涉江。…。

一一日～一九日（関連記述なし）

二十日 …… 九章訣了。…。

二二日、二三日（関連記述なし）

二三日 休講。…。

二四日 又休。…。

二五日〜十月三日(関連記述なし)

十月四日 …夜楚辭會。

五日 楚辭缺卒業、七十二枚、分爲⁽³⁹⁾上下巻。

『缺』執筆の過程、完成の時期および完成時の形態が確認できる。この時は前回楚辭を講じてから十二年が経過している。『尚書』を講じ終わって、楚辭の講義を(依頼者の記載が無いが、今回もおそらく塾生から)乞われると、翌日には執筆に着手し、四五日目に脱稿している。着手時点で、『楚辭缺』という書名が登場し、『天問缺』『九章缺』という表現も見える。書物としてまとめる構想で着手し、注解を書き進めたものと思われる。書き上げた時点での原稿量や体裁も具体的に記されている。

今回は諸篇を「校」してから「夜講」という形態であったが、今回は諸篇に「注」し、「缺」の原稿が仕上がって行く、という形になっている。楚辭と明記する講義の実施記載が無いが、「乞講楚辭」や「休講」の記載があり、「離騷注了」した八月二四日の夜に「夜會」を、「楚辭缺卒業」した十月五日の前後に「楚辭會」を行っていることから、やはり塾生への講義を行った上で試験としての会講を実施したものと思われる⁽⁴⁰⁾。

収録篇への昭陽の姿勢については、この会講のタイミングが目を引く。「離騷」篇をその他諸篇とは独立させて会講を行っている。昭陽が「離騷」篇を特別に重く見ていることが分かる。

また、今回は「遠遊」「卜居」「漁父」「招魂」「大招」の五篇について記載が無い。「遠遊」「卜居」「漁父」三篇については、前

回も記載が無く、今回も(他篇に対し行っている)注を加え、『缺』原稿を書き上げていくという作業を少なくとも本格的には行っていないようである。「招魂」「大招」二篇については、前回文政四年に「夜講」の記録がある。その時の講義ノートがほぼそのまま『缺』原稿になったのであろうか。

3、『楚辭缺』の定稿 『空石日記』卷三八〜四十、天保五〜六

(一八三四〜三五)年(昭陽六二〜六三歳)

(十月五日 楚辭缺卒業、七十二枚、分爲上下巻)

…中略…

十月二一日 …始□莊子瑣説。

…中略…

十一月四日 夜莊子會

…中略…

十二月 孝経開講

…中略…

十二月十六日 易莊子卒講

一八三五(天保六)年

…中略…

一月十三日 句點莊子説

…中略…

十五日 瑣説句點了。…。

…中略…

二四日 莊子瑣説卒業

…中略…

三月七日 易(□) 莊子(天運) 続講。…。

…中略…

六月二日 莊子卒講

…中略…

十六日 礼記開講、莊子煥講

…中略…

十八日 易論□煥講。

七月十日 講老子。

…中略…

七月二五日 釘楚辭訣。…。

「楚辭訣卒業」(脱稿) から「釘楚辭訣」(定稿) まで十数か月、この間、『訣』の書名のみならず、楚辭に関する語は一字も見えず、『莊子』『孝經』『易』『禮記』『老子』などの講義を続け、『莊子瑣説』を完成している。脱稿以後は『訣』原稿に手を加えた記録は無いことから、少なくとも本格的には修訂を加えることなく、約一年置いた後に定稿としたようである。

以上から、『訣』の成書過程は二段階を経ていることが分かる。文政四年に家塾で楚辭を講義した際には、手元の楚辭集に校点を施し、それを元に夜講を行っている。天保五年に家塾で再び楚辭を講義した際には、一篇ずつ注を加えて、『訣』原稿を完成している。講義開始時点で『訣』の書名が出ており、当初から執筆の構想があったことが分かる。

また、(屈原賦と見做して) 収録する諸篇に昭陽が費やす精力は、二段階で一貫している。「離騷」は会講のタイミングからみても、

別格の扱いで、最も重視している。「九歌」「天問」「九章」は「離騷」に次ぐ扱いと言える。「招魂」「大招」は、前二者に比べて格段に軽い扱いで、「遠遊」「卜居」「漁父」は明らかに重視していない。昭陽の諸篇への評価と楚辭への関心の傾向を直接的に反映するものと言える。

四、『楚辭訣』の概容

1、収録している篇

資料1は現存最古の楚辭集、王逸『楚辭章句』(以下『章句』)を軸に、三大古注である洪興祖『楚辭補注』(以下『補注』)と朱熹『楚辭集注』(以下『集注』)、および清代の新注・林雲銘『楚辭燈』(以下『燈』)と、本稿が考察対象とする『訣』について、収録作品を対照したものである。

資料1：楚辭注諸本収録作品

| 楚辭章句 | 補注 | 集注 | 燈 | 訣 |
|--------|----|----|---|---|
| 一 離騷 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 二 九歌 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 三 天問 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 四 九章 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 五 遠遊 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 六 卜居 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 七 漁父 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 八 九辯 | ○ | ○ | | |
| 九 招魂 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 十 大招 | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 十一 惜誓 | ○ | ○ | | |
| 十二 招隱士 | ○ | | | |
| 十三 七諫 | ○ | | | |
| 十四 哀時命 | ○ | | | |
| 十五 九懷 | ○ | | | |
| 十六 九歎 | ○ | | | |
| 十七 九思 | ○ | | | |
| 弔屈原 | | ○ | | |
| 服賦 | | ○ | | |

『訣』の収録作品は『燈』と完全に一致しており、三大古注が収録する「九辯」および「招隱士」以降の後継作品を収めない。

このような編纂方針について、『玦』には序文も跋文も、『燈』のような「凡例」もなく、撰者による表明はないが『燈』は「凡例」でこう述べる。

楚辭原本、皆有續離騷諸作、綴附末卷、大約無屈子之志而襲其文、猶不衰而哭、不病而吟、詞雖工、非其實矣。甚至以莽大夫之反離騷、侈口狂詆、亦列於内、豈非辱極。余止知註屈、不知屈之外、尚有人能續、尚有人敢續者。…今一概從刪…（…楚辭原本にはみな続「離騷」諸篇が収められているが、屈子の志も無くその文に倣っているのみで、哀しくも無いのに泣き、病も無いのに呻き声を上げるようなもの、文辭は巧でも内実を伴わない。甚だしくは王莽に仕えた揚雄が出鱈目に誇る「反離騷」まで収めるのは、屈辱の極みである。私は屈賦に注するのみ、屈原以外に屈賦に続くに値するものはない。…ここにこれら全てを削除する…）。

つまり、従来の楚辭集が屈賦以外の後継作品を収録することを批判して、屈賦（と認める作品）のみを収録するというのである。⁽⁴²⁾以上、①『玦』収録作品は『燈』と完全に一致し、『章句』以来の従来の楚辭集とは異なり、後世の後継作品を収めない。②『燈』のこのような編纂方針は従来の楚辭字に対する批判に基づくものである。③『玦』収録作品が従来の楚辭集と大きく異なり、『燈』と完全一致するのは、『燈』が主張する楚辭観に共鳴した上での一致である可能性がある。⁽⁴³⁾

2、現存する写本

『玦』テキストについては、現存する写本六本を入手して比較検討し、いずれも誤写が多いため、その中で最も善本である慶応本を底本としながらも諸本を照合して改めた。⁽⁴⁴⁾六本の写本は、巻頭「離騷」篇の題下注の相違により大きく二分出来る。

甲類…「離騷」の語義について、『史記』の説を「未詳」とする。

- ① 大阪大学附属図書館懷徳堂文庫蔵本（以下「阪大本」）
- ② 京都大学附属図書館蔵本（以下「京大本」）

- ③ 国士館大学附属図書館楠本文庫蔵本（以下「国士館本」）

乙類…「離騷」語義について、『史記』の説を「九歌」を引いて解釈する。

- ④ 九州大学附属図書館追遠文庫蔵本（以下「九大本」）
- ⑤ 慶應義塾大学附属図書館斯道文庫蔵本（以下「慶応本」）
- ⑥ 二松学舎大学附属図書館蔵本（以下「二松本」）

この甲乙二分類の妥当性については、「離騷」篇「忖」注文の「溘死而流亡、言投水流尸也」十一字の有無など、注文中のその他の異同における一致でも裏付けられる（詳しくは、II巻末校勘参照）。なお、黄靈庚主編『楚辭文獻叢刊』⁽⁴⁵⁾第七七冊に「楚辭玦一鈔本」として阪大本を、「楚辭玦二鈔本」として国士館本を、第七八冊に「楚辭玦三鈔本」として京大本を収める。

また、周論文（二頁）が阪大本、京大本と並列して、「雷山本（雷山古剎蔵）」を挙げるが、国士館本巻頭（『玦』書名の前頁）に「亀井昭陽著 雷山古剎舊蔵」の貼り込みが有ることから、この「雷山本」は国士館本のことと思われる。⁽⁴⁶⁾他に、文教大学図書館、中

国科学院図書館に写本の所蔵があるとする文献があるが、これまでのところ所蔵を確認できない。⁽⁴⁷⁾

（1）「離騷」題下注の異同からみる写本六本の相関関係
以下、違いがある箇所を下線で示す。改行は原文の通り。□は空格を示す。

甲類..

① 阪大本

楚辭訣

亀井昱撰

∴「卷上」無し。撰者名あり。

離騷□史記離騷猶離憂也案未詳篇中有離左 ∴「尤」が「左」に。

字蓋離罹同□一云離別也騷愁也

通篇四句一□轄讀者要案之而不錯焉 ∴「一轄」の間に空格あり。

② 京大本

楚辭訣

∴「卷上」無し。撰者名なし。

離騷□史記離騷猶離憂也案未詳篇中有離尤 ∴「尤」が崩れて

「龍」に近い。

字蓋離罹同□一云離別也騷愁也

通篇四句一轄讀者要案之而不錯焉

③ 国士館本

楚辭訣

∴「卷上」無し。

離騷□史記離騷猶離憂也案未詳篇中有離尤

字蓋離罹同□一云離別也騷愁也

通篇四句一轄讀者要案之而不錯焉

乙類..

④ 九大本

楚辭訣卷上

∴「卷上」有り。

離騷□史記離騷猶離憂也蓋離別而憂也九歌 ∴改行位置が異なる。

思公子兮徒離憂又為離尤離愁之離亦通

通篇四句一轄讀者要案之而不錯焉

⑤ 慶応本

楚辭訣卷上

∴「卷上」有り。

離騷□史記離騷猶離憂也蓋離別而憂也

九歌思公子兮徒離憂又為離左離愁之離亦通 ∴「尤」が「左」に。

通篇四句一轄讀者要案之而不錯焉

⑥ 二松本

楚辭訣卷上

∴「卷上」有り。

離騷□史記離騷猶離憂也蓋離別而憂也九歌

∴改行位置が異なる。「猶」が手

偏に。

思公子兮徒離憂又為離尤離愁之離亦通 ∴「尤」が崩れて「龍」

に近い。

通篇四句一轄讀者要案之而不錯焉 ∴「不錯」の「不」が欠け、

朱筆で添書き。

（2）「離騷」注文の異同から見る写本六本の相関関係

「離騷」篇「曰黄昏」の注「二句出九章錯衍可削」に付される

割注「王氏無注則必非別脫二句。羌字注後出」について、後半「羌

字注後出」五文字を有する本と欠く本がある。⁽⁴⁸⁾

甲類..

資料2：版本六本に見られる違い

表中の○は有、×は無、△は眉注に有るを示す。

| | 項目 版本 | 「巻上」 | 「羌字注後出」 |
|---|----------|------|---------|
| | | | |
| 甲 | ①阪大本 | × | × |
| | ②京大本 | × | △ |
| | ③国士舘本 | × | ○ |
| 乙 | ④九大本 | ○ | ○ |
| | ⑤慶應本 | ○ | ○ |
| | ⑥二松本 | ○ | ○ |

①阪大本 …… 無し。
②京大本 …… 割注に無いが、眉注に「羌字注後出」と書入れ。
③国士舘本 …… 「羌字注後出」有り。
乙類…
④九大本 …… 「羌字注後出」有り。
⑤慶應本 …… 「羌字注後出」有り。
⑥二松本 …… 「羌字注後出」有り。
以上、写本六本の違いについて、改行箇所や空格の有無、字形など、抄写者によって偶然に発生し得る違いは置いて、体裁、注文の有無など、祖本や抄写の元となった本の系統の違いに関わる点を比較すると、資料2のようになる。

以上から、写本六本について、まず、甲乙の二分が妥当であること、次に、その甲乙二群は成立において、前者が先に、後者が後に成立しているものと考えられる。最後に、甲類三本について、①割注「羌字注後出」を欠く、②眉注に注記する、③本文に有るの三様態から、①②③という成立順を仮定出来る。
3、「楚辭訣」の底本について

『訣』の定本について、これまでの先行研究において挙げられているのは、主に莊允益校『王註楚辭』、林雲銘『楚辭燈』、朱熹『楚辭集注』の三説である。以下、それぞれについて、先行研究が挙げる論拠を検証し、当否を検討する。

(1) 莊允益校『王註楚辭』（以下、莊本）説

竹治貞夫『楚辭研究』は「『訣』は、離騷の『駢椒丘』について、『余抱^④莊子謙校本、馳字皆作駢、闕字典不載。』と云っているから、その底本は寛延三年刊王註楚辭であることが知られる。」とする。^⑤しかし、筆者が別稿で指摘したように、『訣』『離騷』注中の莊本引用計七回は全て楚辭テキストの校勘である。ここから、昭陽が楚辭テキストの校勘を莊本で行っていることは確かであるが、底本と断定する根拠としては不十分である。とはいえ、筆者のこれまでの作業から、莊本が底本である可能性は否定できない。その理由は主に以下三点である。

まず、昭陽の『日記』は文政四年に楚辭講義を始める契機を記して、「書生乞夜講楚辭、欣然校之、借道革楚辭燈、徹夜鷄鳴」と言う。もし、この記述がものごとの前後関係を正確に反映しているのであれば、昭陽が「欣然として之を校」したのは『燈』を

借りる前ということになり、つまり校点を打ったのは『燈』とは別の楚辭集ということになる。であれば、その後に家塾で楚辭を講じる間の「校」と「講」の反復における「校」もこの楚辭集に対する「校」である可能性を排除出来ない。『訣』『離騷』注が引用・言及する楚辭注は『章句』十件、莊本七件（全て楚辭本文の校勘）、『燈』七件、『文選』二件である。すると、手元にあつて「校」したのは、莊本であろうか？

次に、「離騷」「國無人（兮）莫我知兮」に『訣』が「七字一句」と注する点である。「七字一句」ということは、『訣』底本では「國無人」の後に「兮」字が無いはずである。『訣』底本説がある三書のうち『集注』、『燈』和刻本（秦本・河内本とも）^①には「兮」字が有り、「兮」字が無いのは莊本のみである^②。

最後に、「遠遊」「卜居」「漁父」三篇の『訣』注をめぐる問題がある。これら三篇については、文政四年、天寶五年ともに『日記』に記載が無い。三章で見たように、他篇については、文政四年には底本に校点を打ち、家塾で講義する過程が、天寶五年には注解を書き進め、『訣』稿が一篇ずつ出来上がっていく過程が記録されている。すると、これら三篇に対しては、「校点」「講義」「注解」いずれも大きな精力を割いていないことは確実であり、これら三篇についての『訣』注は最小限の基本作業ということになる。実際に三篇の『訣』注を見てみると、非常に簡略なもので、「卜居」は二句について計二行のみ、引用・言及文献は無い。「漁父」も五句について計六行、引用・言及文献は『史記』三例のみである。「遠遊」注は前二篇に比してやや詳細で、引用・言及も『集注』

一例、『燈』十例、『莊子』二例、『史記』一例とやや多彩であるが、「遠遊」注で注目すべきは、楚辭本文の異同についての校勘である。

①「徑侍」注「侍當作待……」②「欲遠度世」注「……林本無遠字」③「張樂咸池」注「林本無樂字爲優……」の全三例であるが、①については、「侍」としているのは莊本で、「待」としているのは『集注』と『燈』である。②も「欲遠度世」としているのは莊本で、『燈』のみならず『集注』も「遠」字を欠いて「欲度世」となっている。③も「張樂咸池」としているのは莊本で、ここでも『燈』のみならず『集注』も「樂」字を欠いている。

つまり、楚辭本文は全て莊本と、校勘内容は三箇所とも『集注』『燈』と同一であるが、『訣』は『燈』にしか言及しない。すると、『訣』底本は莊本で、校勘を『燈』で行い、『集注』は参照していない、ということであろうか？

（2）林雲銘『楚辭燈』説

上述した稲畑論文（五八頁）は『訣』を「読騷札記」（楚辭読書メモ）と評しているが、朱論文（八六頁）は稲畑の観点を受けて、更に進んで、以下のように言う。

该书采林云銘《楚辭燈》所收屈原二十七篇（筆者…収録篇の列記を省略）加以注解，内容属于「读騷札记」，以林云銘《楚辭燈》为底本，参以王逸《楚辭章句》、洪兴祖《楚辭补注》、《文选》六臣注《楚辭》、庄允益《楚辭王注校本》等研究成果，仿照王念孙《读书杂志》体例……

つまり、『訣』は『燈』所収の屈原賦二十七篇に対して注解を加えた「読騷札記」で、『燈』を底本とし、王逸『章句』、洪興祖『楚

辭補注』『文選』六臣注『楚辭』、莊本などを参照し、王念孫『讀書雜誌』の体裁に倣っていると云う。しかし、なぜ収録作品が一致すれば、『燈』を底本として注解を加えたものと断定できるのか、具体的論拠は示していない。

他に、孫論文（一四七頁）が、まず『玦』は『燈』を底本としたものと断定し、続いて黄・石川論文の『日記』引用部分「借道革楚辭燈、徹夜鶏鳴」を引き、更に『玦』と『燈』の収録作品が一致することを指摘するが、日記記載や収録作品が『玦』底本を『燈』と断定する根拠とは明言していない。

筆者は上述した別稿において、『玦』の底本は『燈』の可能性が最も高く、莊本是对校本であるという見解を示した。論拠は、①成書過程から、昭陽による楚辭講義および『玦』執筆ともに『燈』と密接な関係を有することが分かること、②二書の収録作品が完全に一致すること、③先行楚辭注のうち『燈』を肯定的に評価する姿勢が顕著であること、④『玦』の編纂形態や注解姿勢が『燈』『凡例』が謳う編纂方針と殆ど逐一共鳴すること、の四点である。

そして、もう一点、当該論文では紙幅の関係から簡潔に指摘するに留めたが、『玦』『九章』注の執筆が『燈』を底本に行われている可能性を指摘できることがある。『日記』天保五年九月十日に「九章」注執筆について「…注惜誦至涉江。」とあるが、『章句』や『集注』の「九章」篇次のように、「惜誦・涉江・哀郢・抽思・懷沙・思美人・惜往日・橘頌・悲回風」と「惜誦」と「涉江」が連続しているのであれば、「至」という表現にはならないはずと思われ、この注解執筆の底本では、『燈』の「九章」篇次「惜誦・

思美人・抽思・涉江・橘頌・悲回風・惜往日・哀郢・懷沙」のように「惜誦」と「涉江」が隔たっている可能性が高い⁽³³⁾。

(3) 朱熹『楚辭集注』説
周誦は朱熹『集注』を『玦』の定本とし、その根拠として二点を挙げる。まず、

《楚辭玦》條目引文、多與朱本相吻合、蓋底本用朱注本、故其校勘、多以朱注本為依歸。參校者、乃《補注》本、單刻《章句》本、莊本、林注本和屈注本等、此外、還有部份校勘亦參考了《文選》本（『玦』が見出し語として掲げる楚辭本文は、多くが『集注』と一致するため、底本に用いたのは『集注』であろう。このため、校勘は多くが『集注』に依拠している。

対校本としては、『補注』、『章句』、莊本、『燈』、屈注本（屈復『楚辭新注』）などの他に、一部の校勘には『文選』も参照している⁽³⁴⁾。

つまり、『玦』に引用される楚辭本文の「多く」が『集注』と符合するためと云う。『多く』が一致するというのは一般に論拠として不十分であるが、加えて、『燈』が『集注』を底本としているため（上述）、『玦』の底本が『燈』であったとしても、楚辭本文が『集注』と「多く符合」することになるため、更に論拠とするには不十分である⁽³⁵⁾。

次に、周は、「離騷」篇「使夫百草爲之不芳」注の異同をめぐって、『集注』が「巫咸之言止此」と言い、『燈』が「巫咸言止此」と言うのに対し、『玦』が「巫咸之言止此」となっていることを指摘して、『玦』の底本が『集注』であることの証左であると主張する⁽³⁶⁾。

これは、『集注』注「巫咸之言止此」を『燈』が踏襲するも「之」字が欠けたものであるが、この箇所『訣』注全文を見れば「林云巫咸之言止此。蓋林説似是」（林は「巫咸之言止此」と言う。おそらく林説が正しい）と言っており、明らかに『燈』注を引いている箇所である。この「之」字の有無で『訣』の底本が『燈』では無く、『集注』である確証とするのは無理がある。

とはいえ、『訣』注における『集注』の存在感は気になるところである。というのも、三章で見たように、「招魂」「大招」の二招について、『日記』文政四年には「夜講」の記載はあるが、それに先立つはずの「校」の記載は無く、天寶五年に行っている『訣』執筆の記録に二招は登場しない。つまり、昭陽は二招に対して多くの精力をかけておらず、『訣』二招注は上述した「遠遊」「卜居」「漁父」三篇と同様に、最小限の基本作業を反映しているのではないかと思われる。そこで、二招注を見てみると、『章句』『集注』『燈』からの引用が主で、莊本による校勘と先秦文献についての知見がまま挿入される。具体的には、「招魂」注に登場する楚辭注は『章句』八例、『集注』十五例、『燈』十五例、「古注・旧説」四例、莊本一例（校勘）。「大招」注では、『章句』八例、『集注』十七例、『燈』七例、莊本一例（校勘）である。『集注』の比重は重い。

以上をまとめると、『訣』の底本に関して、先行研究に於いて提起されている三説はいずれも他二説を完全に排除するに十分な決定的論拠を欠いており、最終的な結論を見るには、『訣』各篇の注解を更に詳細に比較検討する必要があると思われる。⁽³⁷⁾

附記

本研究は科研費「日本楚辭学の基礎的研究—江戸・明治期を対象に—」（課題番号二五三七〇四〇四）の助成を受けたものである。

註

- (1) 亀井家学については、『亀井南冥・昭陽全集』（葦書房、一九七九／八〇年）が南冥・昭陽の著作八卷九冊を収める。亀井三代の伝については、荒木見悟『亀井南冥・亀井昭陽』（明徳出版社、一九八八年）が充実しているが、阿部隆一「亀井南冥昭陽著作書誌」（『斯道文庫論集』十六輯、一九七九年）巻頭の「亀井南冥・昭陽略伝」も前書に無い伝記内容を含む。南冥六世の孫に当たる早船正夫による『儒学者 亀井南冥・ここが偉かった』（花乱社、二〇一三年）における一族に伝わった逸話や現地調査に基づく具体的記述も亀井家に関する細部の理解に有益である。また、近代漢学の祖とも言える西村天四（一八六五／一九二四年）が亀井家学を中心に九州の儒者の系譜を取材した連載記事「九州巡礼」（『大阪朝日新聞』一九〇七年六月二六日／八月六日）に詳細な解題を付した『九州の儒者たち…儒学の系譜を訪ねて』（西村天四著・菰口治校注、海鳥社、一九九一年）も参照価値がある。
- (2) 注1に挙げた関連文献における没年と享年の記載によ

る推定。聴因の生年については、管見の限り明確に記載するものを見ない。

(3) 阿部、前掲書誌、四頁。

(4) 護園とは、荻生徂徠（一六六六～一七二八年）が居を構えた茅場町の地名にちなんでつけた書斎・家塾の名。ここから荻生徂徠の学と学派を指すようになった。

(5) 大潮については、広瀬淡窓『儒林評』に「我海西九州ノ文学ハ、肥前ノ僧大潮ヨリ開ケタルコト多シ。大潮ハ徂徠ヨリ少キコト十三歳。徂徠ノ弟子ニハ有ラネドモ、其交親シク、学問詩文、徂徠ノ説ニヨリテ修セシ人ナリ。徂徠没後、其余声天下ヲ動カス。海西ノ人、其風ヲキキテ慕ヒ、皆大潮ニ従テ其説ヲ学ビシナリ」とある（荒木、前掲書、九頁所引）。

(6) 永富独嘯菴は一七三三（享保十七）年生まれ、一七六六（宝暦十三）年没。医術と儒学を究め、臨床体験をまとめた『漫遊雜記』、経綸をまとめた『囊語』を著す。南冥はそのいずれにも序文、或は跋文を書いている。詳しくは、荒木、前掲書、第二章「永富独嘯菴」参照。

(7) 広瀬淡窓（一七八二～一八五六年）は江戸時代後期に活躍した教育家。私塾・咸宜園を開き、多くの人材を育成した。十代の時、亀井塾に学んでいる。淡窓と亀井家学との関係について詳しくは、田中加代「広瀬淡窓の教育思想の系譜―荻生徂徠・亀井南冥・昭陽の影響を中心として」『教育学研究』第五八巻、第四号、

一九九一年参照。

(8) 阿部、前掲書誌、四頁。

(9) 詳細は、早船、前掲書、第十章「突然の罷免」参照。

(10) 広瀬淡窓『懷旧樓筆記』巻八。早船、前掲書、一九四頁所載。この部分は、明らかに屈原の処世を批判的に批評した賈誼「弔屈原賦」の「横江湖之鱣鯨兮、固將制於螻蟻」を踏まえる。

(11) 修猷館は甘棠館の学生全てを引き受けたため、教員不足に陥り、甘棠館の元教員四名が修猷館教員として採用された。早船、前掲書、二二九頁参照。

(12) 「隊伍会」は、昭陽が藩士として定期的に参加すべき会合であったようである。井上忠「『空石日記』解説」亀井南冥・昭陽全集刊行会編『亀井南冥・昭陽全集』第七巻、葦書房、一九七九年、九〇頁参照。

(13) 福岡藩では、天山、四王山など六山の山上に烽火台を設けた。昭陽の『烽火日記』の記載によると、昭陽の烽火台勤務は一八〇九（文化六）年、昭陽三七歳の年から翌年にかけて計十回である。荒木、前掲書、一一九頁参照。

(14) 竹治貞夫『楚辞研究』（風間書房、一九七八年）や稲畑耕一郎「日本楚辞研究前史述評」『江汉论坛』（一九八六年、第七期）は『毛詩考』を、早船、前掲書は『左伝續考』を挙げる。

(15) 『東遊賦』は文化三年、秋月藩主に従って江戸に上る道

中の見聞を詠んだ賦集。『烽火日記』は文化六年からの十回に及ぶ烽火台勤務の生活を漢文体で記したもの。その漢文の技巧と味わいから当時の文人たちの好評を博したという。詳しくは、阿部、前掲書誌、四七頁および五七～五八頁参照。

(16) 阿部、前掲書誌、五頁。

(17) 早船、前掲書が「浦」の出自について(Ⅱ部第一章第1節)、藩関係者との軋轢について(Ⅱ部第十章)詳述している。

(18) 例えば、論文はCiNii Articles (論文情報検索DB)の場合、昭陽十八件に対し、南冥は三〇件である。南冥に関する論文の内容は大まかに医学面、儒学面、伝記面の三分野に亘る。南冥の伝記は早くは一九一三(大正二)年に高野江鼎湖『儒俠龜井南冥』(共文社)が出ている。

(19) 竹治、前掲書、第五章第四節。

(20) 以上、小稿における竹治の『楚辭訣』評は、竹治、前掲書、三四七～三四九頁参照。

(21) 稲畑、前掲論文、五五～五九頁。

(22) 稲畑、前掲論文、五八頁。

(23) 朱新林「日本庆应义塾大学蔵亀井昭陽『楚辭訣』写本考」『图书馆杂志』上海市図書館学会、第七期(Vol.31)、二〇一二年。

(24) 朱、前掲論文、九三頁。

(25) 周涌「日本鈔本『楚辭訣』整理與研究」浙江師範大学、

修士論文、二〇一三年四月一日提出。

(26) 『中国诗歌研究』社会科学文献出版社、第九輯、二〇一三年九月。なお、標題の「龙井」は「亀井」が正しい。

(27) 孫金鳳「林云銘『楚辭燈』在日本的传播与影响」『宁夏大学学报(人文社会科学版)』第三八卷、第一期、二〇一六年。

(28) 筆者は既に別稿(「亀井昭陽『楚辭訣』に見る林雲銘『楚辭燈』との関係と共鳴」『九州中国学会報』第五五巻、二〇一七年)において、昭陽の日記記述に基づいて成書過程の検証を行っているが、その後の新たな発見があり、底本に関わる見解の見直しを行うため、加筆訂正を加えて再検討を行う。なお、昭陽『空石日記』については、黄・石川論文も言及している。当該論文は引用出典を示していないが、阿部、前掲書誌、八七頁所載の抄録とほぼ同文(若干の省略・脱字有)で、拙稿が指摘する『書誌』における誤字等そのまま踏襲することから、この抄録を引用したものと分かる。また、孫、前掲論文も黄・石川論文中の『日記』引用部分を引用している。

(29) 影印が『亀井南冥・昭陽全集』第七巻(葦書房、一九七九年)に収録されている。

(30) 阿部「書誌」が「講」とし、黄・石川論文も踏襲するが、原文は「校」。

- (31) 阿部「書誌」が「校」とし、黄・石川論文も踏襲するが、原文は「講」。
- (32) 黄・石川論文が「九章、招魂了」とするが、原文に「了」の字は無い。
- (33) 道革は黒田藩の藩医で、昭陽に師事した。藩医であれば、平士の昭陽より、書籍購入に便があったと推測できる。井上忠「香江文庫について」『福岡大学図書館報』No.5、一九七一年六月、三頁参照。
- (34) 尤も、謹厳で知られる昭陽が、「離騷」夜講初日の翌日に病を理由に欠勤していることを考えると、通常のペーシングを越えて、かなりの無理をしたとも考えられる。
- (35) 「物子」は荻生徂徠を指す。徂徠は物部氏の出であることから、中国風に「物」を姓とし、物徂徠とも称した。「會」とは、亀井塾で行われたという「会講」（討論会・進級テスト）のことと思われる。早船正夫『儒学者亀井南冥』花乱社、二〇一三年、一三三頁参照。
- (36) 天保五年八月は大の月であるため晦日は三〇日。広瀬秀雄『日本史小百科〈暦〉』東京堂出版、一九九四年、四五頁参照。
- (37) 阿部「書誌」が「大歌」とするが、原文は「九歌」。
- (38) 阿部「書誌」が「之」とし、黄・石川論文も踏襲するが、『空石日記』影印（前掲注29、六〇〇頁）の字形、および「九章」の篇名から「至」が正しいと判断する。
- (39) 黄・石川論文が「分上下巻」とするが、原文は「分爲上下巻」。
- (40) 前回は「校」と「夜講」が進行するひと月の間に「物子會」「徂徠集會」が二回ずつ計四回記録されているものの、「夜講」している楚辭に関する「會」の記録は無い。
- (41) 「九章」の場合、九月十日に「注惜誦至涉江」、二十日に「九章決了」。
- (42) 但し、『燈』『玦』とも「招魂」「大招」を収める。これら二篇は『章句』に付される序では、前者が宋玉、後者は屈原あるいは景差の作とされている。これら二篇を収める理由は『楚辭燈』『凡例』で述べられないが、黄文煥『楚辭聽直』説に基づくとの指摘がある（『四庫全書總目』卷一百四十八、西村天囚『屈原賦説』「篇数第二」）。その『楚辭聽直』『凡例』は「二招之獨存而又先大招於招魂何也。王逸之論大招、歸之或曰屈原、未嘗以專屬景差。晁氏曰詞義高古、非原莫能及。余謂本領深厚、更非原莫能及、則存大招固所以存原之自作也。招魂屬之宋玉、而太史公曰、讀離騷天問招魂哀郢、悲其志、又似亦原之自作、則存招魂亦併存原耳。即招魂從來屬玉、大招未必非差、而其詞專爲原拈其意與法足與原並、則固足存矣。宜存矣。此豈他篇所可比（句讀点は筆者）」という。
- (43) 『楚辭玦』に見える『楚辭燈』との関係とその楚辭観への共鳴について詳しくは、拙稿、前掲注（28）参照。
- (44) 『玦』写本については、黄・石川論文も「抄録皆未精、

多見讹字。：故诸钞本皆不可偏废，以资互校之需也」
（一一〇頁）とする。

- (45) 黄靈庚主編『楚辭文獻叢刊』国家図書館出版社、二〇一四年。

- (46) 黄・石川論文（一一〇頁）が「雷山古刹旧蔵本」はもとは大阪大学図書館の所蔵で、今は慶應義塾大学に所蔵されていると言うのは未詳。

- (47) 文教大学蔵本については朱論文（八五頁）に、中国科学院図書館蔵本については、黄論文（一一〇頁）に言及がある。

- (48) この割注については、『補注』に「一本有此二句、王逸無注、至下文『羌内恕已以量人』始釋羌義、疑此二句後人所增耳。九章曰『昔君與我誠言兮、曰黃昏以爲期、羌中道而回畔兮、反既有此他志』與此語同。」「集注」に「一無此二句。洪曰、王逸不注此二句、後章始釋羌義、疑此後人所增也。：洪說雖有據、然安知非王逸以前此下已脱兩句邪。更詳之。」と言う。

- (49) 『訣』慶応本では「據」。

- (50) 竹治、前掲書、三四七頁。

- (51) 『燈』和刻本について詳しくは、拙稿、前掲注二八論文、六一頁および巻末注一六を参照。

- (52) 確認した版は以下の通り。 莊本については、①早稲田大学蔵本②九州大学蔵本③大阪大学蔵本④島根大学蔵本（いずれも前川六左衛門、寛延三年刊）。『集注』につい

ては、人民文学出版社版（一九五三年、鄭振鐸跋有り）。『燈』については、①京都大学蔵本（秦本）②二松学舎大学蔵本（秦本）③東京大学蔵本（秦本）④宮崎公立大学蔵本（河内本）。

- (53) 現在見ることが出来る『訣』『九章』篇次は伝統的篇次を踏襲しているが、その理由について、孫論文（一四七頁）は、『訣』九章「題下注が『九章 猶曰九篇也。朱子得之云後人輯之得其九章、合爲一卷。或有亂或否、又有橘頌、非一時之作。林氏考改九篇之次、汔有所見、然亦有臆說臨時述感率易雷同。不同九歌、分斷凡八」」（「は割注」と、『集注』説を支持し、『燈』説に批判を加えているのを引いている。

- (54) 周、前掲論文、四頁。

- (55) 他に、黄・石川論文（九四頁）も、『日記』中の「借道革楚辭燈、徹夜鷄鳴」の記載を引用するも、「《楚辭訣》条目引文、与朱熹《集注》本多合、蓋底本用朱子《集注》、故其校勘、多以朱注本为依归。」と、周と同様に、楚辭本文が『集注』と「多く符合」することを以て、『訣』底本を『集注』とする。

- (56) 周、前掲論文、五一頁。

- (57) 以上、本解題は中国昆明屈原与楚辞学国際學術討論会（中国・雲南大学、二〇一七年十一月九日～十二日）に於ける発表「日本楚辞学的黎明… 亀井昭陽《楚辭訣》小考」に再編加筆訂正を加えたものである。

II 『楚辭缺』『離騷』篇定本（附校勘）

（凡例）

一、『楚辭缺』（以下『缺』）テキストは、左の六本の写本を比較検討した結果、慶応本を底本とし、残り五本で対校を行った。六本の写本は次のように二分出来る。

甲類…「離騷」の語義について、『史記』の説を「未詳」とする。

①大阪大学附属図書館懷徳堂文庫蔵本（以下「阪大本」）

②京都大学附属図書館蔵本（以下「京大本」）

③国士舘大学附属図書館楠本文庫蔵本（以下「国士舘本」）

乙類…「離騷」語義について、『史記』の説を「九歌」を引いて解釈する。

④九州大学附属図書館逍遙文庫蔵本（以下「九大本」）

⑤慶應義塾大学附属図書館斯道文庫蔵本（以下「慶応本」）

⑥二松学舎大学附属図書館蔵本（以下「二松本」）

二、『缺』テキストは、楚辭見出し語を太字、割注を小字で示す。

三、改行は慶応本に拠る。句点は筆者による。

四、諸写本の書体の異同は非常に多いが、ここでは挙げず、正体字に統一する。

五、諸写本は誤写に類する異同が非常に多い。単純な誤写は全ては挙げず、底本とした慶応本を改める時のみ全ての根拠を示す。

離騷 史記、離騷猶離憂也。^① 盖離別而憂也。

九歌、思公子兮徒離憂。又爲離憂離愁之離亦通。^②
通篇四句一轄。讀者要案之而不錯焉。

攝提 林西仲得之。

云吳名也。離斗柄正指于寅方是爲正月。

初度 生時之風度也。度字義汎月及干支包焉。

正則 名平也、平是正法。

靈均 字原也。可食者曰原。^③ 廣平曰原。

言靈廣而平也。非原是靈妙如砥者。字是冠時賓所命而併言之。辭家之文也。

脩能 美能也。楚辭脩字訓美。

初秋蘭 初結也。

汨余若將弗及 汨、心不自安貌。言汲汲於國事。

阼 疑是丘阜一名。舊說山名、在楚南。^④

木蘭 王云、去皮不死。案本草、涉冬不凋、木蘭宿莽、

二句言要其性命強剛耳。意受上句。

不淹 淹有留意。

恐美人之遲暮 始提其君。二恐字相照。^⑤

不撫壯而棄穢兮何不改乎此度 撫循也。撫于五辰

之撫正同。^⑥ 度言其所由行也。君方壯而我亦未

耄、是國事更張之要時也。故曰、君今不乘壯時英

氣而放逐讒佞、而何故夷居不改此齷齪之行

乎。壯字自上二恐字來。

來吾 來予與爾言一例。君若用賢才馳騁千里、

吾將爲前馬以啓行。

申椒與菌桂 林氏可念。

云椒桂帶辣氣、喻逆耳之言亦能受也、不但用純香而已。

申菌未詳。本草有菌桂、李時珍云、葉卷

如竹筒故名。今本从草作菌誤也。然則桂一種

歟。

彼堯舜之耿介兮 提自上古而既然以起桀紂。

既遵道而得路 既字可玩。先三后後堯舜之意在焉。曰道曰路

似自洪範來。無有作好惡進退之道。此乃光大也。

昌被 王云、衣不帶貌。劉良云、亂也。

捷徑 桀紂之失王之道路也。

幽昧以險隘 不耿不介也。唯是作好作惡而已。

皇輿之敗績 君車必困于幽險、御者失其轡。

而壓覆矣。左傳未嘗登車射御則敗績厭覆

是懼。

忽奔走 忽字受恐字、忠切屏營之意可味。

及前王 楚先哲王也。監于堯桀是語線。

余之中情 所以奔走先後之心也。

忍而不能舍也 忍、忍身患也。

指九天以爲正兮 正猶證也。

忍患而唯君是證、天神共知之耳。

靈脩 神也、美也、故以稱君。

曰黃昏 二句出九章。錯衍可削。王氏無注則必非別脫二句後出。

注後出。

成言 亦出左傳。要結言語之謂也。

悔遁 背前言而躲避也。

數化 無恆則末路危、所以傷也。我輩別則必將被謂小愚弄。

余既滋蘭 四句言已多培植群才也。屈子博學、必多弟子。

吾將刈 育英材者欲以供國用、故也。

萎絕 比群才窮處、以至老死也。是天命無可如何。

蕪穢 比玉石混雜、貞士而題以僞也。屈子所育成、都爲俗士。

內恕己 已貪婪、故妄意屈子亦求利祿。以小人之心、量君子。

嫉妬 恐屈子之率群才、以獲于君也。

忽馳驚 忽下添欲字看。

追逐 奮飛而去不顧之意。

所急 決起潔身亦非所欲。唯要立名遂臣節耳。

擘木根 亦佩具也。取剛堅。擘與攬同。

矯菌桂 揉以佩之。四句是娉以練要處。

騫 在楚辭爲發語詞。九歌注得之。下文騫騫、騫亦詞也。

所服 上所服是唯我所法前哲也。世俗何服。

彭咸 至此始露已中心所自決。下受以長大義、情至文至（13）。

多艱 哀生民困于塗炭也。亦屈子中心。我死則長將憂國。

戰戰 心戰戰而不開、出九章。王氏得之。

朝諝 諝、告也。與訊同。兩通賦、既諝、以忠告衆。

蕙纊 馬腹帶亦曰纊、出管子。曰既曰、言屢以忠信傳渠。

民心 君茫然不察闔國公論是以謠諑行。

謠諑 謠爲毀、未見所徵。林云、徒歌曰謠。

競周容 背規繩而競容悅、故邪媚進而正士窮。

饨 玉篇、悶也、憂也。湓死而流亡、言投水流尸也。

何方圓之能周 猶曰方圓何能周也。奇句。

攘詬 林云、攘、取也。

死直 自屈心至此一氣讀。是屈子別提一個臣節

以自奮厲者。

所厚 厚猶重也。

屈子雖然曰自屈抑忍讓以伏死者固非人所宗也

悔相道之不察 昔不察屈心死直之道而今乃悔

之、故將行且延佇也。都是眷眷之意。

及行迷之未遠 不遠復、无祇悔。¹⁹⁾迷復凶。

駝椒丘 與蘭皋對。王謨。

余疑莊子謬誤本。應皆作駝。閱其義不載。

且焉止息 躊躇以深思也。

進不入 進而言遂不聽也。此屈子又幡然自改者。

止息而念之。椒蘭之言萬萬無可進之方。

昭質 內德也。與芳澤外飾對。

此屈子節初服內省不疚者

忽反顧 內省不疚、故又幡然生四方之志。

觀乎四荒 唯是遠游也。固非求賢君耳。

佩繽紛 二句言行色之揚也。

有所樂 四句言脩娉自遂決遠游之意。

嬋媛 林云、柔態牽戀之貌。

博謇 二字必有一誤。²⁰⁾

賁蓀施 賁當作資。取以盈室。是姊之美意也。

衆不可戶說 此二句與次二句前後錯誤。此二句

屈子所歎以緩遠游。四句與靈氛語未全同。²¹⁾

不余聽

姊責之也。

雖車張、獨離不暇、世事樂群、汝何怨、獨而不聽余言乎

節中 節有等、節其中而執之也。

惡心 發憤張氣也。

歷茲 心歷思之也。歷吉日之歷。

啓九辨與九歌 山海經、夏后開、上三嬪于天得九

辨與九歌以下、此其說也。²²⁾以下

數十句皆屈子陳辭、夏康至后辛皆風切時事。

淫遊以佚田 書云、淫于遊于田。²³⁾羿篡位後事。

射夫封狐 此辭家之妙也。夫狐蠱不無蠱惑。²⁴⁾

亂流 羿、逆亂之餘流。固無有終之理。²⁵⁾

厥家 王氏得之。非國家之家。²⁶⁾

縱欲而不忍 不忍、惑溺不能制欲也。²⁷⁾

常違 居恆失道也。²⁸⁾或云背常道。

乃遂焉 不聽諫而遂其違也。

后辛之殄醢 至此語氣愈切以激。²⁹⁾

嚴而祇敬 自皋陶謨日嚴祇敬六德來。³⁰⁾

不頗 此離騷之大眼目。³¹⁾屈子唯抱繩墨。

錯輔 是財成輔相之人、聖哲而用事於天下者。

聖哲之茂行 莊子謙校本、之誤作以。

顧後 上顧難以圖後、其語相類。³²⁾

相觀 下文亦出。蓋監察之義。

計極 未詳。或藝極之義歟。言民之常則也。聖哲顧

瞻前後、以觀民極則非義非善、斷不可服用。

危死 莊本、衍節字。危、幾也。言濱於死。

覽余初 初是屈子本志也。³³⁾

正柄 柄、刻木端所以入鑿。³⁴⁾孔正、直立牢固之也。

以殄醢 余又何悔矣。

吾令鳩天問、簡狄在臺、玄鳥致貽、此蓋所以使鳥

也。前時遣蹇脩而不可、故遣鳩與雄鳩歟。

世人所好也

以不好 以顏色不美毀之也。

心猶豫 恐雄鳩又誤事而狐疑也。

既受詒 下女可詒之詒、使鳳皇代已而適也。

恐高辛 鳩與鳩沮格其事故也。

欲遠集 行而至曰集。二句與覽相觀二句應。

聊浮遊 比之周流于天、意氣既懈矣。

留有虞之二姚 留者不使行也。求而獲之也。

理弱 王所不求、故媒禮不盛。

恐導言 佚女也。二姚也。竝以恐字取結。宓妃我棄

之。娥姚非曰事不諧、哲王不寤、未如之何已。

世溷濁 自鳩鳩媒拙來、直言實事。

稱惡 媚鄭袖也。上曰嫉妬、此曰稱惡、各有所當。

既以逢遠 莊本、脫以字。

不發 雖有是心、不敢發之。上面所言空想耳。

與此終古 溷濁之徒、不足與言故也。

筵簞 二物蓋竝折竹爲簞者。

兩美 屈子既美德不孤、必有同心者、故曰兩美。

孰信脩而慕之 楚人誰信汝美而愛之乎。

豈惟是其有女 是、是楚國也。

九州必有知汝者豈唯是楚國已乎。

曰勉遠逝 辭更端、故用曰字。

世幽昧 依舊傷楚也。楚之衰如此、故欲從古占然

未敢奮飛矣。四荒之志未伸。

其獨異 好惡雖人異、唯黨人好惡大異於人。

二句妙語

狐疑 好惡反覆以惑其君、故不忍去也。

要之 要迎也。詩云、要我乎上宮。

百神翳 翳、是濟濟蔽天之貌。

竝迎 百神天降而九疑之神亦迎之來集也。

皇剡剡 皇亦神威赫爚之貌。

靈皇出九歌

吉故 吉祥善事也。

上下 亦升降也。辭沓而已。前曰上下而求索。

架瓊之所同 此瞻九州而相君之說也。始出。

求合 求其好仇也。能調言和合也。

先鳴 言蚤鳴也。百草不芳、似言秋景。

不芳 林云、巫咸之言止此。蓋林說似是。

何瓊佩 已中情好脩之事也。上下照應。

蔓然 掩曖之意。

謂中情

中情好脩而行媒且不得。

何昔日 君不好脩、故有美質者、亦大壞從俗。

羌無實 變而不芳、無復蘭之本性。

容長 言枝葉暢茂也。

苟得列 徒有蘭之名耳。

能祇 椒蘭不自當其芳。

惟茲佩 屈子之瓊佩也。

委厥美 我亦欲棄美以從時、而又經歷顧念之。

難虧 厥美終不可委也。

和調度 蓋言歌樂也。聲調律度。

樂九歌樂後出

求女 依然車牽之意、而無求君之心。

及余飾 因求女四荒之志又勃然。

靈氛 屈子無擇君之心、故不提巫咸而提靈氛。

爲余 二句、命僕夫之辭。

璠象 玉輅象輅、自古有之。

周流 言路之遠而迂回也。

翼其承旂 爲左右翼以從旂也。

容與 少憩以求所濟也。

徑待 徑餒之徑。我率我車而疾馳、故勵衆

車飛騰而避于徑、以西海爲期會之地也。

也余車 或云、西皇來涉、故有是千乘之盛也。

八龍 侈言而倍四馬也。莊子亦曰九車、曰十二經⁽⁴⁾。

抑志 千乘八龍甚泰、故自抑亦騷之立格可謂守

臣節也。志雖抑乎、神則高馳、此模寫之妙。

奏九歌 二句言神雖馳乎、姑且躊躇也。此時屈子

之心、又恍惚于魏闕之下。離王廢敗、國容荒敗、而
屈子則有是憂大知略、而

陟陸皇 三字未詳。

忽臨睨 言不能奮飛之意以終之。突然奇轉。

僕夫悲 曰僕曰馬、竝實語。與上世溷濁同結法。

蜷局顧 蜷然局顧也。二句取結何等神妙。

國無人莫我知兮 七字一句⁽⁵⁾。

又何懷 自奮決絕之辭也。懷之甚故也。

爲美政 故都無是人也。他國何關。王氏大謬。

從彭咸 屈子溘死流亡之志、此時已決矣。

註

(1) 『史記』「屈原賈生列傳」に「離騷者、猶離憂也。」とある。

「凡例」に示すように、「史記、離騷猶離憂也」以下は甲乙二種がある。甲類は本文に示す通りである。一方、乙類は「案未詳。篇中有離憂字、蓋離權同。一云、離別也。騷愁也。」とする。また、国士館本は「史記、離騷猶離憂也」の後に「與君離別而憂」と薄墨で添書き。以下、国士館本には同様の添書きが多いが省略する。

(2) 「離騷」篇の題下注において「離騷」の語義を「九歌」を引いて解釈するのは九大・慶応・二松本の三本。このうち、「憂」字について、慶応本は「左」に作り、九大・二松本は「尤」のくずし字に似る。

(3) 「二恐字」は「恐年歲之不吾與」「恐美人之遲暮」を指す。

(4) 『書經』「虞書」「皋陶謨」に「撫于五辰、庶績其凝」とある。

(5) 慶応本のみ「由」に作る。その他五本は全て「申」。

(6) 『書經』「周書」「洪範」に「無有作好、遵王之道。無有作惡、遵王之路。」とある。

(7) 六臣注『文選』「離騷經」「何桀紂之昌披兮、夫唯捷徑以窘步」注に「良曰、桀紂夏殷失道之君。昌披謂亂也。」とある。

(8) 慶応・国士館・二松本は「轡」（たづな）。阪大・京大・九大本は「輿」。京大本は薄墨で「轡」と添書き。

(9) 『春秋左氏傳』襄公三十一年に「若未嘗登車射御、則敗

績厭覆是懼、何暇思獲。」とある。

- (10) 「王氏無注」の「注」は、底本・慶応本では「庄」に作るが、その他五本は全て「注」とするのに拠る。「羌字注後出」は慶応・国士館・二松本に有るが、阪大・九大・京大（但し眉注に有り）には無く、「必非別脱二句」で割注が終わる。

- (11) 『春秋左氏傳』襄公二十七年春に「楚公子黑肱先至、成言於晉。丁卯、宋戌如陳、從子木成言於楚。」とある。

- (12) 「九歌」「雲中君」「謇將儺兮壽宮、與日月兮齊光。」「集注」注に「謇、詞也」とある。

- (13) 慶応本は「長大息」の「息」を書き落として、「情至文至」の下に書き足し。後世のものと思われる修正が入っている。

- (14) 「九章」「悲回風」に「心鞿羈而不形兮、氣繚轉而自締。」とある。

- (15) 班固「幽通賦」に「既訊爾以吉象兮、又申之以炯戒。」とある。

- (16) 『國語』「晉語二」二十六年に「亡人之所懷挾纓纒、以望君之塵垢者。」とある。

- (17) 「茫」は六本全て崩し字。阪大本以外の五本では「浩蕩」と添書あり（国士館本は字体が不鮮明）。

- (18) 阪大・京大・国士館本には「湓死而流亡、言投水流尸也」無し。九大・慶応・二松本は有り。

- (19) 『易經』「上經」「復」卦に「初九 不遠復。无祇悔。元

吉。」とある。

- (20) 慶応本「二字必有一誤」の下に「林本、博博二作ル」と書き込み。後世のものと思われる。

- (21) 慶応・九大・国士館本は「未」。阪大本「未」字無し。京大本「未」と添書き。二松本「未」に似る。

- (22) 『山海經』「大荒西經」に「西南海之外：有人珥兩青蛇、乘兩龍、名曰夏后開。開上三嬪于天、得九辯與九歌以下。」とある。「王氏不達」とは、『章句』が九辯九歌を禹樂としていることを指すか。『補注』は王逸が『山海經』を見ていないため誤ったとする。

なお、「張説」は、文脈から『文選』五臣注の注者の一人張銑を指すはずであるが、名について、慶応・二松本は楷書体で「説」に作り、阪大本は三水偏、京大・国士館・九大本は草書体で言偏にも三水偏にも見える。また、「大誤」とは、五臣注『文選』に「銑曰、啓開也。九辯九歌、禹樂名。言禹開樹此樂而太康娛樂自縱而喪」とあるのに対し、『補注』が「五臣又云、啓開也、言禹開樹此樂、謬矣」と指摘していることを指すか。

- (23) 『書經』「周書」「無逸」に「繼自今嗣王、則其無淫于觀、于逸、于游、于田」とある。

- (24) 阪大・京大・国士館・二松本は「狐蠱：無蠱」。九大本は「狐□：無□（蠱の異体字？）」。慶応本は「狐蠱：無□（蠱の異体字？）」。最後の「惑」は阪大・京大本が「惑」。九大・慶応・国士館・二松本が「或」（慶

本には「心」添書き）。

- (25) 『詩經』「大雅」「蕩之什」「蕩」に「靡不有初、鮮克有終。」とある。

- (26) 『春秋左氏傳』僖公十五年に「姪其從姑、六年其通、逃歸其國、而棄其家、明年其死於高梁之墟。」とある。

- (27) 慶応・二松本「繳」（まどふ）。阪大本・京大本「激」（はげし）、国士館本「微」（めぐる、もとむ）。九大本はサンズイか糸偏か不鮮明。文脈から推して「激」とする。

- (28) 『書經』「虞書」「皋陶謨」に「嚴祗敬六德、亮采有邦。」とある。

- (29) 『周禮』「秋官司寇」「野廬氏」に「若有賓客、則令守涂地之人聚柝之、有相翔者則誅之。」とある。

- (30) 『爾雅』「釋天」「風與火爲庀」邢昺疏に「庀庀熾盛之貌」とある。

- (31) 慶応本のみ「敷」の後に「庀徒渾切」と朱筆書き入れ。

- (32) 甲類三本全て「闇」にサンズイ有り。乙類三本全てに無し。

- (33) 「猶思」は、乙類三本全てが「猶思」。甲類三本全てが「尚憶」。

- (34) 国士館・九大・慶応・二松本は「至此」。阪大・京大本は「此至」。

- (35) 慶応本は「既」に作るが、他五本は全て「即」に作る。

- (36) 「九章」「思美人」に「令薜荔以爲理兮、憚舉趾而緣木。因芙蓉而爲媒兮、憚蹇裳而濡足。」とある。

- (37) 九大・慶應本は「狼」に作る。阪大・京大・国士館・

二松本は「很」。

- (38) 阪大本に「借宓妃以刺鄭袖也」に一文字ずつ朱点を振って、眉注に「黃文煥無有此說」（と読める）と言う。

- (39) 周、前掲論文（四六頁）は、これを三疊字とみて、昭陽の指摘を誤りとする。

- (40) 慶応本は「下女可貽之貽」と部首が貝。二松本も貝に似る。その他四本は言偏。

- (41) 国士館・九大・慶応・二松本は「故」有り。阪大・京大本は無し。

- (42) 「衰」は、慶応本では「哀」に作るが、その他五本全て「衰」に作る。

- (43) 『詩經』「國風」「鄭風」「桑中」に「期我乎桑中、要我乎上宮。」とある。

- (44) 二松本のみ「九軍」を「九車」に作る。『莊子』内篇「徳充符」に「勇士一人、雄入於九軍」とある。また、「十二經」とは、『莊子』外篇「天道」に「孔子……往見老聃、而老聃不許、於是繙十二經以説。」とあるのを指すか。

- (45) 七字ということは、『玦』底本では「國無人」の後に「兮」字が無いはずである。莊本には無い。『集注』『燈』和刻本（秦本・河内本とも）には有り。